

黎明期の放送通訳

水野 的
(本学会元会長)

放送通訳との関わり

放送通訳が定着してすでに 30 年以上が経過しました。テレビでの通訳(同時通訳)が最初に注目されたのは 1969 年のアポロ 11 号の月面着陸の時だと思いますが、それ以降しばらくはテレビでの通訳はごく限られたものでした。しかし 1970 年代末には主要テレビ局で一斉に音声多重放送サービスが行われるようになり、1984 年にはテレビ朝日で JCTV 製作の CNN Daywatch という番組が始まります。こうして少しずつテレビ放送に携わる放送通訳者・翻訳者が現れます。1987 年に NHK 衛星放送の試験放送が始まり、1989 年 6 月に本放送が始まると海外テレビニュース番組の数が一挙に増え、それにともなって通訳者と翻訳者の需要も大幅に増えました。これは主に NHK-BS1 が海外放送局制作のニュース番組を通訳者の日本語訳をつけて放送するという形式を採用したためでした。(もちろん字幕もありました)。そして衛星放送の発足がたまたま世界史的激動期と重なり、1989 年の天安門事件やベルリンの壁崩壊、とりわけ 1991 年の湾岸戦争を契機に、放送通訳という分野が脚光を浴びることになったのです。その後の展開についてはよくご存知かと思いますが、別の報告で詳しく述べられると思います。

放送通訳との個人的な関わりは 1986～1987 年頃からだだったと思います。先述の CNN Daywatch という番組のニュース翻訳に始まり、その後、1988 年の 1 月頃に NHK の衛星放送で初めて放送通訳をしました。アメリカ大統領選挙の予備選挙の討論会でした。(最終的に、共和党はブッシュ候補、民主党はデュカキス候補となったときです。)1987 年に始まった NHK の衛星放送の試験放送は、1989 年 6 月に本放送になるわけですが、この頃は BS1 で何を放送したらいいのか、局側も暗中模索だったようです。(BS2 の方は難視聴地域解消のために総合テレビとほぼ同一の内容だったと思います。)外国のニュース番組は最初から多かったのですが、今ほど多言語ではありませんでした。ときには医学の国際会議を通訳つきで流すなど、今では信じられないような番組もありました。それだけコンテンツ不足だったわけです。政治家や経済学者などへのスタジオでのインタビューもかなり多かったと思います。当然これにも同時通訳がつきました。1989 年 12 月の米ソ首脳会談(マルタ会談)などは、終日特別番組を組んだりしていました。その後、時差通訳による CNN, ABC, BBC などのニュース番組が定着し、「世界を読む」や「クローズアップ現代」(総合テレビ)などの番組ではひんぱんに同時通訳によるインタビューが放送されるようになっていきます。

放送通訳と会議通訳の違い

放送通訳・翻訳に携わって痛感した会議通訳との違いは、大きく言って 2 つありました。一つは放送通訳に適用されるジャーナリズム全般の言語規範と放送メディア固有の言語規範、もう一つ

は視聴者への言語的対応です。ジャーナリズム全般の言語規範というのは新聞などの活字メディアと放送メディアに共通するもので、言葉の選択(語彙)の問題です。典型的なのは人名、地名、組織名などの「定訳」です。これとは別に放送メディアに固有の規範があります。それは耳で聞いて分かりやすいように使用する語彙と文章を作ることです。語彙の場合は難しい言葉はできるだけ使わずにやさしく言いかえること、同音異義語、類音語、類義語、紛らわしい言葉に注意すること、略語の処理の仕方などです。文の作り方としては、長い修飾語句や文を避けること、日本語として自然な語順を心がけること、助詞の省略や体言止めをしないこと、受身表現を多用しないこと、などです。

視聴者への言語的対応との方は、主に音声的な規範というべきものです。通訳者の発する音声だけで聴衆に理解してもらうためには様々な工夫が必要ですが、会議通訳を勉強しているときはそういうことはほとんど気にしたことがありませんでした。具体的には発音やイントネーション、アクセント、話すスピード、ポーズの置き方、そして文全体の読み方などです。こうした点は放送通訳から会議通訳への重要なフィードバックになると思います。

ニュースを通訳するとは

インタビューの通訳などは会議通訳と共通する点が多いのですが、ABCやCNNなどのいわゆる packaged news の通訳は会議通訳とはかなり違います。典型的なニュースの構成としては、まずアンカーがリードを読み、レポート本体ではレポーター→インタビューカットが何度か繰り返され、最後にレポーターが締めくくります。つまり短時間のうちに談話が次々と切り替わっていくのですが、これを原則として一人の通訳者が通訳します。ですから、発言者が短時間(1秒から数秒)で切り替わるような場合、ある話者の発言の訳をできるだけ次の話者の発言に重ならないように訳しないと、画面に映っている発言者とは別の人物の発言を訳しているということになりかねません。発言と訳出がずれると視聴者は混乱してしまいます。テレビニュースが音声と映像で構成されているため、通訳者は原文が映像と対応している場合には訳文を映像に合わせなければなりません。特に単語ごとに映像が切り替わるような場合は細心の注意が必要になります。具体例で見ましょう。

<映像>	<音声>
均衡財政合意に署名する大統領	Remember the historic agreement to balance the budget?
グラフィック:\$26 billion という数字	The transportation bill busts that to the tune of \$26 billion.
(スクールバスを降りる子どもたち) *この映像は次の部分へのつなぎ。	To make up the difference, Republican promises to cut other programs but don't say which ones.
黒板に答を書く小学生	It could mean less for schools,
パトロールする警察官	law enforcement,
患者の血圧を測る看護師	or health.

“To make up the difference...”のセンテンス以外は音声と映像が緊密に対応しています。この対応には直接的な対応関係から間接的な対応関係まで、その程度はさまざまです。”What they have been afraid of is this.”のようなセンテンスで、“this”の指すものがテキスト上にはなく、その瞬間に画面に提示される映像を指すこともしばしばあります。もちろん会議通訳でもPPT(昔はスライド)やビデオを使うことがあります。しかし、音声と動画・画像との緊密な対応関係という点では大きな違いがあります。

映像による補完と引喩

もう一つは、映像が音声情報にヒントを与える、あるいは文脈を提供するという側面です。たとえばCNN Headline Newsにこういうのがありました。アンカーの「移民問題が手の付けられない状態になっている」という簡単な導入部に続いて、レポーターがいきなり次のように言います。

“For the tired, the poor, and the huddled masses yearning to breathe free, the United States has always been a refuge.”

下線部が何か変だと感じるのは、Emma Lazarusの詩The New Colossusからの引用が含まれているからです。原詩は以下の通りです。

Give me your tired, your poor,
Your huddled masses yearning to breathe free,
The wretched refuse of your teeming shore,
Send these, the homeless, tempest-tost to me,
I lift my lamp beside the golden door!



ニュースのこの冒頭部分を理解するには、したがって、ある程度の背景知識が必要になりますが、ヒントがないわけではありません。レポーターのこの発言のときに、映像は自由の女神の遠景になっています。詩の内容も自由の女神と関係がありますが、それだけではなく、Lazarusの詩は自由の女神の台座に刻まれているのです。ですからこの映像は視聴者に長期作動記憶への検索手掛かりを与えてくれているのです。

また、ABC World News Tonightのスポーツニュースではアンカーが次のように言います。

- ① In a quiet little town of New Market, ② in the heart of Virginia's Shenandoah valley,
③ an area rich in history ④ and scenery, ⑤ stands the kind of ballpark that inspires memories and dreams.
⑥ If you sweep it, they will come.

この音声に対して、映像は、①田舎町の通り ②谷に近い牧場の遠景 ③南北戦争時代の砲台のある史跡 ④牧場やサイロなどの風景 ⑤簡単なフェンスのある球場、と音声にぴったりと対応する

ように編集されています。そして⑥で、映像は球場を大きなブラシで掃く野球選手になります。問題は⑥の表現です。これは 1989 年に公開されたアメリカ映画『フィールド・オブ・ドリームス』の中に出てくる”If you build it, he will come.”を踏まえた表現です。⑥の直前には”dreams”という語もあります。このニュースは映画の内容とも関係があるのですが、それは省略します。

ともあれ、このように引喩(allusion)がニュースの内容についての背景や文脈を指示することがあります。翻訳はかなり難しい場合もあるでしょう。

もう一つの例を見ておきましょう。これは CNN の Diplomatic License という番組の一部です。

Well, solving the Bosnia deadlock is not as easy as saying “Round up the usual suspects.” That line is of course from World War II era movie Casablanca. This week in Casablanca, Morocco, Israelis and Arabs talked business at an economic development conference: a whole new situation, not on the magnitude of Ingrid Bergman leaving Humphrey Bogart. You choose who, you would rather, here sums up this momentous development.

“If I may borrow the Humphrey Bogart line from the motion picture ‘Casablanca’ this conference could be the beginning of a beautiful friendship.” (Warren Christopher, Secretary of State)

“I think this is the beginning of a beautiful friendship.” (movie clip)

この場合は引喩の参照先が最初から明示されています(下線部)。そこにクリストファー国務長官の発言が直接引用され、直後に引用元の映画のクリップが挿入されます。

これらの例はテレビニュースのテキストが、音声と画面(映像)との cohesion と同時に、引喩による別のテキストとの cohesion によって、ある統一的な意味の流れ(coherence)を作り上げていることを示しています。またテレビニュースでは、新聞など書き言葉によるメディアではまずありえないようなテキストが生じることもあります。たとえば、

(...) It proclaims war on terrorism, but does little “to protect our people from occupation, terror, and ethnic cleansing practiced by Israel.”

このセンテンスの前半はレポーターの発言ですが、後半を実際に発言しているのは PLO のアラファト(元)議長であり、このとき映像もアラファト議長になっています。別の話者による音声をつなぎ合わせて一つのセンテンスを作っているわけです。このような(音声)テキストを通訳(翻訳)することには固有の難しさがつきまといます。特に時差通訳の場合はこれまでの通訳の手法では間に合わないところがあり、技術的な点で通訳は翻訳に限りなく接近して行きます。

以上挙げたように、放送通訳には他のメディアやテキストタイプには見られないような問題があります。このあたりはもっと理論的に詰めていく必要があるのですが、あまりできなかったなという反省があります。放送通訳の研究にはまだまだやるべきことがたくさんあるはずですが、ぜひ多くの人に挑戦してほしいと思います。